審査員特別賞

「あきらめなくてもいい」

見澤　富子さん

　「えっ、再検査なの」
それは娘が高校三年のとき。健康診断で「甲状腺肥大」と診断され検査を薦められた。
当時受験生ということもあり、親子で戸惑った。しかしひとつ後悔したのはもっと早く受診させてやればよかったということ。思い返せば数ヵ月前から娘は眠さやだるさを訴えていた。それでも毎日学校に行き、塾にも休まず通っていた。だからまさかバセドウ病だなんて思いもしなかった。そう。娘が病院で下された診断、それはバセドウ病だった。
はじめて聞く病名。診察室は重々しい空気に包まれた。どこか死さえ思わせるような空気。「それって治りますか」
私は思わず先生に問いかけた。
「長期戦になることからまずは薬。そして安静」
そう言われて病気をあとにした。娘と帰る道のりは長く感じられ夕陽がなかなか沈まないように思えた。どうして娘が、よりによってこんな時期に。私は居たたまれない気持ちになった。かわいそうで娘に話しかけられずにいる。そのときだった。
「お母さん」「ん？」「すぐ治るよね」
時が止まった。その言葉は深く私の心に突き刺さった。娘は焦っていたのだ。受験まであと半年しかない。志望校のレベルにも達していない。その気持ちを考えたら「わからない」とは言えなかった。でも「すぐ治る」は無責任。娘が望む答えを言ってあげたいのに自信がない。
「治るといいよね」
私は力なく言った。こんなことしか言えない自分をあらためてダメな親だと思った。
それから娘は安静にするどころか机に向かい出した。「病気に負けたくない、試験まで時間がない」そんな心の現れだった。でも無茶をすればするほど症状は悪化した。眠気やだるさは増し、いつだって見れば机に突っ伏して寝ている。開いたままの参考書、つけっぱなしのデスクライト、飲みかけのブラックコーヒー。すべての時間が止まっていた。布団で休めと言えば怒る。まもなく手の震えも出始めて、娘は茶碗を割った。しばらく泣いていたが割ったことが悲しいのではな

い。その泣く姿を見ればわかった。病気の苦しさ、つらさ、娘の絶望。受験をやめろと言えたらどんなに楽か。だが言えない。しかし苦しむ娘を見ていたら早く楽にさせてあげたかった。だから私は専門学校や推薦を考えるように言ってみた。しかし、それは逆に娘を失望させた。「お母さんはもう受からないと思ってるんでしょ」と。そのとき私は結局、自分が楽になりたいだけだと気づいた。娘が辛そうにしていると自分も苦しくなる。ひとつ肩の荷を下ろしたい。そんな気持ちだったのかもしれない。しかしもっと辛いのは娘。親としてどうしたらいいかわからなくなっていた。

次の検診のとき、案の定、甲状腺ホルモン値は安定しなかった。無理もない。安静とは言えないような生活だ。先生もしばらくデータを見ながら黙りこんでいる。そのときだ。

「先生」

娘が振り絞るように言った。

「いつ治りますか。受験なんです」

先生は画面から目を離し、そして娘の方を向いた。

「それはあなた次第です。いまは焦らず薬をきちんと飲むこと」

「薬飲んで寝たらすぐ治りますか」

「受験は、いまがんばらなくていい。でもあきらめなくてもいい」

医師はそう強く言った。そして続けてこう言った。

「今はベストな状態ではない。でも薬を飲めば少しずつよくなる。こうしてベターな状態を重ねる先にベストな自分がいる」

思わず手帳に書き留めておきたいくらいの言葉だった。薬は増えたけれど、それ以上にこの言葉が娘の心に効いた。先生がくれたのは「休む勇気」だった。それから娘はパタリと勉強をやめ、その年の受験を見送った。

人生をふりかえり、あのときバセドウ病になっていなかったらと思うこともある。病気は苦しい。身体だけでなく心に与える影響も大きい。苦しいのは患者だけでなく、その家族も同じである。できるなら代わってやりたいと何度そう思ったことか。そういう意味では、病気にかからない方がいいのかもしれない。しかし病気と向き合うことで、娘は以前より自分の人生を生きているように思える。日々葛藤の連続。でもそれを越えて人として大きく、強く、そしておおらかな女性になった。家族もまた病気の娘から気づかされることがたくさんあった。当たり前のありがたさ。人のやさしさ。人間の強さ。

娘はそれから看護の道に進んだ。彼女を突き動かしたのは「あきらめなくてもいい」という先生の言葉だった。そして今日も自らの体験をもって、先生の思いをつないでいる。病気だからって、夢をあきらめなくてもいいのだと。その白衣が今はすごくすごく眩しい。